

昭和 10 年代における〈文化〉論：I ——大政翼賛会文化部長・岸田國士の発言を中心に

"Culture" in the Early Showa Era (1935-1945): I — Focused on Remarks by Kunio Kishida, Director of Cultural Division of Imperial Rule Assistance Association

松 本 和 也

Katsuya Matsumoto

Abstract

This paper presents the investigation and analysis on theories of culture in the Showa era 10's.

In Chapter 1, the concept of "culture" and the preceding studies are examined as a starting point of the paper. In Chapter 2, theories of culture written by Kishida between 1935 to 1942 are reviewed. Following the discussion in Chapter 2, Chapter 3 extensively deals with the research and analysis of cultural theories in the same time. Finally in Chapter 4, the prospects of cultural theories, which were changing with the opening of the Pacific War, are examined.

Through the examination above, it is verified that Kunio Kishida is a keyman of culture theories in the Showa era 10's. On top of that, the paper reveals that speech and writing by Kishida in the period had extended the field of culture, along with the shift of time from the "protection of culture" to "construction of culture."

1：はじめに

この論文は、昭和 10 年代における文化論について、検討を試みるものである。本稿の見取り図を、あらかじめ提示しておく。まずは、「文化」という用語－概念それ自体の検討からはじめ、次に昭和 10 年から昭和 17 年までに岸田國士が書いた文化論を、昭和 10 年代をみわたしながら分析していく。さらに、岸田の文化論を歴史的に理解するために、視野を広げて当時の文化論を調査し、それらをコンテクストとして昭和 10 年代における〈文化〉の様相を多角的に検討していく。最後に、太平洋戦争開戦とともに、〈文化〉がどのように転回（変化）していくのかについても考察する。以上の検討を通して、岸田國士が昭和 10 年代における〈文化〉

論のキーマンであったことを立証しつつ、さらに、「文化の擁護」から「文化の建設」へという歴史的な〈文化〉論のシフト・チェンジに連動するようにして、岸田による〈文化〉論が、〈文化〉という概念を拡張することに大きく寄与したことを示していく。

本稿の主題でありながら、その厳密な定義をついにしえない「文化」という用語－概念をめぐる、まずはその捉え方の原理的な困難さについて、次の辞典記述を参照しておく。

culture 文化・カルチャー 英語で一番ややこしい語を二つか三つ挙げるとすれば、culture がそのひとつとして挙げられるだろう。それはひとつには、この語自体が、ヨーロッパの言語のいくつかにまたがって、複雑な歴史的発達をとげたため

もあるが、おもな理由は、この語が現在いくつかの違った学問分野で、またいくつかの相容れない異なった思想体系において、重要な概念をさすようになっているためである¹。

日本語で「文化」という用語・概念を考える場合、英語に限らず、独語、仏語など、諸外国（語）の文脈からの翻訳も容易に想定され、その様相はさらに複雑さを増す。もとより本稿では、検討対象として照準をあわせる「文化」を、歴史的条件によって限定してはいく。第一に、実体的に存在したとされる文化（現象）一般ではなく、言表（言語化）された言説上の〈文化〉（この意味での文化を本稿では〈文化〉と表記する）を対象とし、第二に、昭和10年代²を視野に収めながら、特に日中戦争開戦以降、太平洋戦争開戦前までの期間に注目する。これを別言すれば、大政翼賛会文化部長となった岸田國士の発言＝〈文化〉論を主題に据える、ということでもある。もとより、それらの歴史的な位置を測定するためにも、岸田〈文化〉論の受容・評価を含めて、同時期における〈文化〉論も本稿の検討対象とする。

このような昭和戦前期の文化論を対象とし、かつ、戦中・戦後を連続したものとして捉えた先行研究として、赤澤史朗「戦中・戦後文化論」がある。議論の前提を、次に引く。

一九四〇年の近衛新体制このえの成立から敗戦に至る時期には、国家の統制の手はあらゆる文化領域に侵入し、文化のそれぞれのジャンルでは国策に対応するための統制団体の結成が進められた。またすべての文化の存在理由は、少なくともタテマエのうえでは、なんらかの形で国家や戦争に役立つという点に求められていたと言える。ところがこれに対し敗戦後には、これまでの国家統制のシステムは一挙に解体され、超国家主義的・軍国主義的であると目されて排除され

る一部のものを除いては、多くの領域の文化の担い手が、基本的には国家と無縁にその活動を自由に展開できるようになった。そして新たに、良心の自由から思想・信教・学問の自由にいたる精神的自由の諸権利が認められたことによって、文化活動は個人の自主性に基づくものであることが公認されるようになったのである³。

こうした《相違》を、《かなり根本的なもの》だとしながらも、《他面で一九四〇年代の前半期の文化状況と後半期の文化状況との間には、ある種の共通特色が見出せる》という赤澤は、《文化と政治の密接な関わり》、《それぞれの文化の領域で知識人・文化人と民衆との接近が積極的にはかられようとしたこと》、《この時期が、日本の近代化過程への問い直しがおこなわれた時期であったということ》⁴という3点をあげている。つまり、昭和戦前期の文化（論）は、一面で、戦後へと連続していく地続きの要素をもつというのだ。

こうした見解には本稿も同意するが、次のような戦時下文化の捉え方には異論もある。

戦時下の偏狭なイデオロギーを背景とする思想抑圧と、文化活動を支える物的条件の窮乏化は、あらゆる文化というものを総じて貧しくみじめなものにしていった。しかし戦時動員体制の形成は、それ以前からの社会構造の変容をいっそう促すことによって、それにともなう新しい文化活動の展開を生み出すべく作用した面があり、また他方からするとこうした戦時動員体制は、結局のところ、文化の生産にとって不可欠の自由の領域を、完全に押しつぶすことができたわけではなかったのである⁴。

戦後からみた結論としては上のようにいえたとしても、本稿で以下に議論していく昭和10年代には、たとえそれがアジア・太平洋戦争を

肯定することと不可分な面をもったとしても、〈文化〉をめぐる議論が盛んに交わされ、その中で国民や地方といった従来文化論の主役とはみなされてこなかった要素を、積極的に意味づけていく動きもみられたのだから。

また、赤澤は、本稿でも注目していく岸田による文化論も組上に載せているが、そこから導かれた整理・考察は次のようなものである。

「政治の文化性」というのは近衛新体制の合言葉の一つであり「政治に文化性を与える」というあいまいな言葉は、この時期、文化人の政策立案のポストへの登用を促すキャッチ・フレーズの一つであった。この言葉に対する岸田の独自の解釈の中に、文化の性急な政治利用を批判したり、それに抵抗する意図がこめられていたことは明らかである。しかし問題は、岸田がここで提起した、風俗を匡し人間的反省を促すといった課題が、おそらくいかなる政治との結びつきによっても、解決できる領域には属していない点であろう。その限りで岸田は、望むべからざるものを望んだとも言える。新体制の掛け声は、部分的には国策を批判するエネルギーをも国策の中に組み込む結果をもたらしたのであった⁶。

こうした議論は、やはり戦後からの視座によるもので、また、政治に対する現実的な効果を基準としている。しかし、同時代の視座からみれば、岸田の〈文化〉論は、前後する時期にひろく議論を喚起する契機となったばかりでなく、言説をシフトさせる力ももった。もとより、広範な射程を備えた赤澤論の問題構成ゆえではあるが、とりあげた岸田の論文が3本に限られている⁷という問題もある。事実、岸田が大政翼賛会文化部長を退任した後の無署名「文芸手帖」（『文藝』昭17・8）においては、次のような岸田評価がみられた。

文化部長に就任した当初の岸田國士氏は、よき文化批評家として輿論をリードした。この頃の岸田氏はさかんに饒舌つた。あらゆる機会を逸さずに意見を述べた。そしてその意見は、実際的な効果を生んだと私は思つてゐる。今の頭で考へると、不思議なくらゐだが、当時の東京の文化思想は何と言つてもヴァレリイやジイドやマンの文化擁護思想の影響下にあつた。権力と文化とは対立する二つのもので、文化は権力から自らを擁護しなければならないといふ考へ方であつた。この文化擁護論に廻れ右前へおい！の号令をかけたのは、外ならぬ岸田國士氏であつた。そして積極的に更に一歩進めて装飾的な文化を克服した概念として、生活文化といふ旗じるしを掲げたのも岸田氏であつた。この思想転換をやつてのけた功績は、岸田國士氏の一年八ヶ月にわたる文化部長としての事業の中でも特筆すべきものだらうと思ふ。（141頁）

ここで《思想転換》と称された「文化の擁護」から「文化の建設」へというシフト・チェンジは、大東亜共栄圏を擁する日本国民のナショナル・アイデンティティーとも不可分であり、それゆえアジア・太平洋戦争を肯定することにもつながっていくだろう。

他方、岸田國士に関する先行研究としては、安田武⁸が大政翼賛会文化部長というポジションをめぐって、あるいは今村忠純⁹が『生活と文化』と『荒天吉日』を中心とした戦時下の姿勢について、それぞれ問題化している。ただし、いずれも論題通り、歴史的条件下における岸田の軌跡に興味関心の中心が設定されており、ひろく〈文化〉を論じるものではない。

戦後、岸田は大政翼賛会文化部長を務めたことにより公職追放となるが、しかし、イデオロギー的裁断以前に、同時代の視座から岸田の〈文化〉論を、まずはていねいに読み解く必要がある。というのも、昭和10年代における岸田（の

〈文化〉論)は、困難な時期に〈文化〉を根底的に問い直し、広範な議論を喚起するばかりでなく、同時代においては文化人たちの希望ともなり、戦後にも少なからぬ貢献を果たす礎石ともなっていたのだから。しかも、昭和10年代において岸田は、その〈文化〉論を通して、「文化の擁護」から「文化の建設」へという歴史的な〈文化〉論のシフト・チェンジに大きく関わったキーマンでもあったのだ。

2:大政翼賛会文化部長・岸田國士による〈文化〉論

2-1:

ここでは、昭和10年代へと至るまでの、岸田國士のキャリアから、特に〈文化〉に関わる局面を、断片的にとりあげ、以下の議論の前提として素描しておきたい。それに先立ち、人物紹介として『アジア・太平洋戦争辞典』における「岸田國士」の項を引いておく。

きしだくにお 岸田國士 一八九〇——一九五四 劇作家、小説家、評論家。一八九〇年十一月二日、東京に生まれる。父は軍人。陸軍幼年学校・士官学校を経て少尉に任官するが、軍務に嫌悪を覚え辞職。東京帝国大学仏文科選科に入学し、念願のフランス文学に取り組み、一九一九年渡仏。その後ジャック＝コポーに演劇理論を学び、二三年に帰国後、戯曲『古い玩具』『チロルの秋』『紙風船』を発表、劇作家としての地位を確立した。多くの戯曲のほか、ルナールの『にんじん』などの翻訳、長編小説『由利旗江』『双面神』『暖流』などがある。三七年文学座を結成、三八年明治大学文芸科長となり、映画演劇科を新設。二・二六事件前後から『風俗時評』など社会風刺的作品を発表。日中戦争開始後、文藝春秋社特派員として北支戦線を視察して『北支物情』を発表。四〇年十月明治大学を辞

し、大政翼賛会文化部長に就任、各地を講演して回り地方文化運動に力を注いだ。また四一年六月発足の日本移動演劇連盟委員長に就任、四三年同理事。四二年七月翼賛会文化部長を辞任したが、四七年それが原因で公職追放となった。五四年二月五日死去。六十三歳¹⁰。

ここにすでに、多難な昭和10年代の岸田の軌跡は明らかだろう。こうした生涯をふまえながら、本節では昭和10年前後までの岸田の〈文化〉の捉え方に注目していきたい。

まず、フランスより帰国後に発表された、処女戯曲「古い玩具」(『演劇新潮』大13・3/当^{アン・スワイル・ジョナス}初仏語で書かれたもので、原題は「黄色い微笑」)があり、概要は次の通りである。

「黄色い」日本人の肖像、と「肉体的の弱点」を容赦なくあばき、そのうえ日本にあるのは「どの点から見ても矛盾と破綻に満ちた住み心地の悪い社会」であると断じ、そのような日本人であることにたえられない日本人男性(白川留雄)と、この日本人男性に寛大な理解を示し、愛情を訴えるフランス人女性(ルイーズ・モオプレ)、の恋愛と結婚が、日本人男性の裏返しにされたナショナリズムのために破滅する、というのが「古い玩具」のプロットである¹¹。

従って、同作には、岸田という文学者の《根本的な課題》として指摘される《ヨーロッパ近代文化の誤れる摂取によって畸形化された日本文化の無秩序へのたたかいの姿勢》が、《はっきり認め》¹²られてもきたのだ。その後も岸田は、劇作や新聞小説¹³を通じて西洋文化と日本(文化)との相克・葛藤をさまざまなかたちで問題化していくのだが、それが端的な形で爆発したのが「風俗時評」(『中央公論』昭11・3)¹⁴である。対話形式の断章7つから構成された「風俗時評」の「五ある家庭」には、次の対話が書

きこまれている。

息子。〔略〕お父さんは、独逸や仏蘭西や英国や露西亜を、何処も御存じですね。現代のさういふ国々の生活が、決して理想的ではないにしろ、また、恐らく、かなりの類廃味を帯びてゐるにしろ、なほかつ、人類の進歩に役立つ大きな伝統の力で支へられてゐるとはお思ひになりませんでしたか？

父。日本にだつてそれはあるんだ。それが、一時、混乱期に遭つて、流れを堰き止められてゐるのさ。西洋にも、さういふ時代が幾度もあつたのだ。外国から流れ込んで来る文化の力が、非常に強大な場合、それを享け容れようとする面と、これを阻まうとする面とが、互に摩擦し合つて、結局それは一つに合するのだが、当座は非常に水も濁るし、波も立つのだ。その期間は、相反する面が二つながら、完全な姿を保たずに、軽佻と粗野、奇矯と傲慢といふ風に対立した外観を呈するのだ。しかし、やがて、時間がそれを調整してくれる。表面のあくが取れて、次第に統一のある洗練された文化が生れて来る。お前は、さういふ時代を明日にでも望んでゐる。それはよくわかる。が、ある統一、ある純化に達するまでには、すべてのものが揉み合ふことこそ必要だ。是非、さうなけれやならんのだ。手つ取り早く、東と西とを調合するなど、いふことは、個人なら別だが、民族なり国家なりの立場から考へると、人が云ふほど簡単に行かぬ。その点、保守派の連中も、やつぱり、あせりすぎ、心配しすぎてゐるよ。(23～24頁)

ここで論及された問題は、明治に入って近代化を志向して以来の難問で、昭和10年代にはアジア・太平洋戦争と関わっていよいよ盛んに議論されていくだろう。あるいは、リレー評論

「文学者と愛国心」に「日本に生れた以上は」(『文学界』昭11・8)を寄稿した岸田は、そこで《西洋崇拜と、西洋のある部分に羨望を感じることは、別ものであるといふこと》、《現代日本が住み難いと思ふこと、日本以外の国に住みたいと思ふのとは別もの》、《なんでもひとつに片づけてしまはないこと》(164頁)といった認識を示してもいた。

その後も、『文学界』座談会を中心に、後に体系化されていく岸田〈文化〉論が、その萌芽をみせていく。たとえば、谷川徹三・三木清・戸坂潤・佐藤信衛・小林秀雄・河上徹太郎・林房雄・村山知義・阿部知二・岸田國士「座談会現代文学の日本的動向」(『文学界』昭12・2)において岸田は、《現在の民間におけるいろいろな文化運動といふやうなものが日本ではいろいろな障碍のために思ふやうな結果が得られないでゐる、さういふ部門がたくさんあると思ふ》(217頁)、《たとへば今日一般の民衆の非文化的な頭脳を養ひつゝ、あるいろいろな要素がある。さういふものがどういふわけで非文化的であるかといふこと、さういふことを民衆に直接知らせるばかりでなくて、現在、民衆を指導してゐると考へてゐる人間達にも、もつと啓蒙的にさういふ考へ方を注ぎ込む必要がある》(227頁)と発言している。また、浅野晃・清水幾太郎・今日出海・東郷青児・中島健蔵・青野季吉・小林秀雄・三木清・岸田國士・林房雄・河上徹太郎「文化の大衆性について」(『文学界』昭12・6)においても、政治の《腐敗》を指摘しながら、次のようにして《民衆》への〈文化〉解放を謳つていく。

現在の政治といふもの、或は議会政治といふものに民衆がさつきいつたやうに愛想をつかしてゐるやうなことは、議場にさういふ空氣が実がないといふこと、それが現在の日本の政治の一つの腐敗でもあると思ふんだけど、これは結局政治家が文化のいろいろな部門にわたつての教養がないと

か、或は少くともある特殊の部門の専門家でありすぎるとかいふふうなことのあらはれで、たとへば日本の議会政治では、未だかつて文学とか或は音楽とか美術とかいふやうな事柄が代議士の間で雄弁に議論されたことがない。民衆は無論実利的な方面に最も関心をもつけれども、同時に政治の文化的な、装飾的な現はれにも魅力を感じるものだと思ふ。さういふものが非常に稀薄な政治といふものには、民衆はなんとなく親しみがもてないんぢやないかね。(74～75頁)

その後、日中戦争開戦後には、文藝春秋社から派遣されて北支、中支の戦地へと渡り、また従軍ペン部隊¹⁵にも参加した。この時の体験・思索は、『北支物情』(白水社、昭13)、『従軍五十日』(創元社、昭14)の2著¹⁶にまとめられ、高い評価・支持を得ていく。

こうした経歴の帰結として、無署名「人物クローズ・アップ 岸田國士」(『新潮』昭13・6)の冒頭では、『岸田國士は今日では一種の社会的名士になつてしまつた』といった岸田像が描かれることにもなる。同文に即して具体的に列挙すれば、『山本有三のあとを受けて明治大学の文芸科長の職にあつて、その仕事もなかなか几帳面にやつてゐるらしい』こと、『劇壇における位置、通俗長篇小説における位置は随分大きくつて、どこことなく身についてゐる生活態度の厳しさまで立派にこの人を社会に押し出す役目をはたしてゐる』(124頁)ことが、まずは論及される。そこから、「チロルの秋」以来の演劇関係の経歴が振り返られつつ、『人物は極く律気で紳士的であるから、たいていの人間は、この人は気弱いインテリゲンチヤだぐらゐに思つてゐたかも知れない』という文字通りの人物像にくわえ、『士官学校を終へて中尉か大尉かまだ軍籍にあつたのだが、上官と喧嘩し、面罵したあげく軍籍を去つたといふだけでも相当のものと言はなければなるまい』(124～125頁)

と、かつて軍人であつたことが特筆される。その後、東京帝大選科で仏文学を学び、渡仏して『ジャック・コポオか誰かの近代劇の正統を深く学びとつた』という『ねばりつ気の強』さから、『品格が崩れてゐるわけでもなく、下世話に砕けたやうな俗人ぶりもないあたりは決して普通の日本人ではない』(125頁)と、その性格(特異性)までが顕揚される。また、新聞小説についても『持つて生まれた潔癖さのために、ばつとした俗受けはしないやうであるが、下手に子守娘を喜ばせるやうな下卑た処がなく、また構成に巧みであるといふ劇作の経験がものを言つて、いい舞台が与へられても、舞台負けすることのないのは流石』(125～126頁)だと、岸田の性格と演劇の経験が加味されつつ高く評価される。それらを集積すれば、この時期における岸田とは、『今では劇作家としてよりも、新聞小説家として、また社会的名士として、同時に文壇に出て来た新感覚派の仲間よりも重々しい位置』(126頁)にあることが、浮かびあがってくる。そこに、「匿名文学放談会」(『文学界』昭15・4)で指摘された、『いま一番——即ち子供のやうに、日本の運命とか、日本の文化だとか、一所懸命にこだわつてゐるのは、林房雄ではなくて、岸田國士だな』(247頁)といった岸田評価も重なる。さらに、現実的な人脈・諸条件が重なることで、岸田は大政翼賛会の初代文化部長へとおしあげられていく¹⁷。

2-2:

昭和15年10月、大政翼賛会文化部長に就任¹⁸した岸田國士の第一声は、『世界的文化の母胎 大政翼賛会文化部長に就任して』(『朝日新聞』昭15・10・20)であり、タイトル通り〈文化〉論となっている。重要な一文なので、長くなるがその要所を次に引いておく。

文化といふ問題について、之もごく広い意味に私は解釈したいと存じます。今日まで比較的閑却せられてゐたこの種の政策

が、国防国家建設の体制の中に取入れられたことを私は決して偶然だとは信じません。国家総動員の一重要資材たる国民の精神力は、文化の健全な基礎の上でなければ旺盛な発揮をみることは出来ないのです。

元より文化問題を取扱ふ上に於て平時との相違は大いにあります。つまり国防国家の求める文化統制は平時に於ては是とされる一部の傾向を排撃し、抑制しなければなりません。

しかし乍ら一方我々は新しい秩序をもたらす指導民族としての重大な役割を自ら負うてゐるのでありまして、所謂非常時局は国家千万年の生命に比べて、これは一つの限られた瞬間であります。この期間に醸成される国民文化の特質がその後に来るべき時代のために禍となるやうなものであつてはなりません。

我々が子孫に残す文化的遺産が非常時以外に通用しないやうなもの、国民生活を低く貧しくするやうなものであつては由々しいことであります。

現代日本の文化創造はそれ自体として、他の諸民族の上に長く光被して、真に世界的文化の母胎となると言ふことが理想だと信じます。(5面)

岸田のマニフェストともみられるこの一文は、〈文化〉を主題としながら、『国防国家建設』、『非常時局』という新体制運動におけるキーワードが用いられる歴史的な文脈の中、その担い手に『国民』を据え、『現代日本の文化創造』を、広い空間軸、長い時間軸に位置づけることで『世界的文化の母胎』たらんことを目指すものとなっている。つまり、同論は日本国民を主人公とした、帝国日本の〈文化〉論なのだ。もちろん、タイトルにいう『世界』には、戦争を通じて拡張していく帝国日本の領土が想定されている。ここに西洋文化を体験し、リベラルな印象

も強い岸田の両義性が、すでに明確にあらわれてもいるが、こうした特質は近衛新体制やそのブレーンである昭和研究会にも共通する¹⁹⁾。

もとより、限られた専門家が担ってきた政治／文化をひろく国民・《日本人》へとひらくべきだという岸田の姿勢も、揺るがない。「生活文化の建設 衣食住への再考察」(『読売新聞』昭15・10・17夕)において岸田は、『私は今後日本人の生活法に関してもつと具体的に研究してみたい』、『然しそれがためには徒らに他民族を模倣するのではなく、日本人の特質を伸ばし、日本人の性能に適したものを考へて行くべき』(3面)だと発言している。

こうして岸田がその〈文化〉論において強調していく生活というキーワードは、すぐさま岸田國士・阿部知二「生活の文化【一～六】」(『東京日日新聞』昭15・10・22～27)によって拡声されていく。対談初回で『日本の文化のためには是非あなたに一骨折つていただきたいといふのが、恐らくすべての人の熱望だとおもひます』(『生活の文化【一】』、『東京日日新聞』昭15・10・22、5面)と、岸田への期待を表明する阿部は、「生活の文化【六】」(『東京日日新聞』昭15・10・27)において、それを次のように具体化して語つてもいた。

かうして私がお相手して語つてゐると、何かしら文学的対談会になりさうですが、こん度のあなたの扱はれる「文化」は決してそんな狭いものぢやないのですね。芸術一般はいふまでもなく、教育も科学も、それからいまお話になつたやうな「生活文化」一切もが、お仕事の中に入つてくる。測り知るべからざる広汎重大なお仕事ですね。それはまた複雑で面倒なことですね。しかし、強くやつていただきたいのです。「暴力政治」はいかぬが、「強力」な指導は今もつとも必要だとおもふのです。信望をうけて立たれたあなたが、小節にこだはらずに力をふるはれることを希望します。(5

面)

こうした広義の〈文化〉について岸田は、「政治の文化性」(『文藝春秋』昭15・12／質問：河上徹太郎)においても、『今までの政治は、いはゞ文化性がないといふことが欠点であつて、今度の新しい政治の体制は、文化性をもつことが重大だといふこと』と、『従来時々口にされた、文化の擁護といふ觀念を、茲で排ひ除けたらどうか、といふこと』とを指摘しながら、『文化』という用語・概念の根源的な問い直しを出発点に、次のように語っている。

新文化創造といふ積極的な目標に向つて行く文化部面の人達の気構へとしては、今までの文化意識といふものを、多少變へて行かなければいけないのぢやないかと思ひます。文化の定義なんといふものは、どうでも付きますが、文化といふ言葉で連想されるやうな今までの意識、之を變へて行くことが必要なんぢやないでせうか。(86頁)

つまり岸田は、抽象的な原理論として〈文化〉の問い直しを企図していたのではなく、日本の近代化という歴史的経緯をふまえ、直近の議論として昭和10年代初頭の「文化の擁護」を前提として、新体制運動下、高度国防国家を目指す現代日本の〈文化〉論を構築しようとしていたのだ。この論点について岸田は、『文化の擁護といふやうな声が起つて来た原因はいつたい何処にあるか、といふ点を考へてみると、結局は現代の世界の到る処で、政治といふものに本来の意味での文化性がなくなつた所から、文化の擁護といふ言葉が出たのではないか』、『日本で特にこの言葉が、知識層の頭に非常に印象を与へたことは日本の現代の政治といふものが、又極端に文化性を失つて居るからだ』(88頁)と、「文化の擁護」論が隆盛をみた原因を探っている。これに対して河上は、次のように応答している。

文化の擁護といふ言葉の中には、どうしても贅沢品の保存といふやうな意味が含まれて居つた、それがいけないのです。今の時勢は事變に因む難局であるといふことゝ、それから一方では、これは全然関係なくはないのですが、日本の文化といふものが、従来の孤立した各部門が成長して来て、今や一つの融合した世界を醸し出さうといふ非常に大事な時機に際会して居るといふことゝ、この二つの広い意味での危機が一つにぶつつかつて居るわけなのです。だから非常に消極的な目先の事變処理といふことだけで、ものごとを考へないやうにする必要があると思ひます。(92頁)

こうして、「文化の擁護」を乗り越えた先に、『目先の事變処理』にとどまらない射程をもち、『世界的文化の母胎』たらしとする岸田の〈文化〉論は位置づけられていくだろう。

また、「岸田國士・島木健作対談」(『中央公論』昭15・12)では、『国防国家といふものの中で、文化はどういふ取扱ひを受けるべきかと言ふ問題』(174頁)がとりあげられる。この点に関して、『実にいろ／＼の意見がある』のだと認め、『これは後廻しだといふ説が出たり、或る場合には、今までとに角出来上つてゐる文化自体を、こゝで利用すべきだと考へられたり、一方また既往の考へ方では、文化の發展などは望まれず、全く、国防国家のために必要な文化だけをこれから作り上げるべきだといふ考へ方等々が今日ではごつたになつてをる』という〈文化〉をめぐる混乱した状況を示した上で、『こいつを僕等はもう一応はつきりと決めてかゝらなければいけない』と断じる岸田は、次のように述べる。

政治に文化性を与へるといふことにしても、我々が今日まで、かうあるべきものと考へてゐた文化と、方向を転ずべき今後の日本に於ける文化との間には多少相違があ

るのではないかと思います。それを曖昧にして置いては、文化部門の仕事も一そう困難だ。例へば文化の擁護といふ立場になると、これはもうこゝで我々は討死の覚悟をしなければならん。そんな消極的な立場でなく、新しい文化の建設といふ方に、若し行き得るものとすれば、これは今までの文化の意識と、稍や変つた文化を目指さなければならん。(174 頁)

こうして昭和 10 年代をみわたす岸田は、昭和 10 年前後に隆盛をみた消極的な《文化の擁護》論から、積極的な《新しい文化の建設》論へとシフト・チェンジを図っていく。

また、岸田が目指すひろい〈文化〉の射程は、生活を経由して地方へも及んでいく。

文化の地域的偏在といふことも亦いろ／＼な意味で云へると思ふ。僕は、それ／＼の地域が、それぞれの優れた文化をもつてゐる状態が、一番理想的と思ふのです。一国の文化政策としても、或は国民のそれ／＼の社会的関心といふ点から云つても、さう言ふ方向に向つて努力しなければならんと思ふ。たゞ今後の健全な文化とは、一つは生産面に於ける文化、もう一つは生活から遊離した所に発展したものでなく、本当に生活に根を下した生活現象の発展としての文化でなければならぬ、といふ、二つのことが云へると思ふ。(176 頁)

これが、岸田が大政翼賛会を通じて、後に地方文化運動や移動演劇へと発展させていくところの理念（の原型）である。

もとより、文学（者）に関しても、岸田特有の〈文化〉論が提出される。文学無力説の系譜²⁰の一つにあたる、岸田「文芸の側衛的任務」（『文学界』昭 15・12）がそれである。

同論でまず岸田は、戦時下の文学（者）に寄せられた期待を、次のように把握してみせる。

今日の政治は、既に文学に多くのものを求めてゐることがわかります。文学者も亦、その職能に応じて、国防国家建設の一区処を受けもつべきであることを自覚しはじめました。

しかし、私の見るところでは、現在の政治が文学に求めてゐるものは、或は愛国心の鼓舞とか、国策の宣伝とか、健全な娯楽の提供とか、少し大袈裟なところでは、民族理想の高揚といふやうな方面に限られてゐるやうであります。更に、文学を含めての文化政策としては、思想戦への参加といふことも称へられてゐますけれども、その思想といふ言葉の意味が狭い政治的な範囲に止まつてゐるやうに思はれます。

つまり、〈文化〉論一般同様、文学への理解が《狭い》ことを指摘した上で岸田は、『国防国家建設といふ極めて特殊な時局的表現』を用い、『国民的事業への邁進を、軍隊の戦闘行軍に譬へ、文学のこれに應ずる任務を大体二つに分けて考へてみたい』として、『第一は前衛的任務、それは読んで字の如く、前方の敵に備へて、本隊の進路を開き、その行軍並に戦闘準備を容易ならしめる先駆部隊の任務』（11 頁）だとする。ただし、『文学者は概して、政治家としては不向きにできてをり、また自らもそれを知つて』いる、それゆえに『自分たちがしなければならぬと思ふこと、しかも、主として創作活動を通じてなし得ると思ふことは、第二の側衛的任務』なのだとして、その具体的内実を次のように語っていく。

文学の側衛的任務とは、前衛に対して、本隊の側背を護り、前面の敵に気をとられて、不意に側面から攻撃を受けるのを防止する任務であります。国防国家として、この任務はまた極めて重要で、これに当る部門はほかにもありませうけれども、私は、

文学こそ、その主力的なものだと信じて疑はないのであります。(12 頁)

さらに岸田は、『すぐれた文学とは、かゝる側面の敵に備へ、国民の心の隙を戒め、乱にゐて治を忘れない精神のひろさと静かさを与へる重要な任務につくもの』であり、『時代に眼覚めた文学者は、この文学の側衛的任務のために、おのおの、その才能と努力と情熱とを傾けようとしてゐる』ことを、『かゝる時代に生れ育つた国民の一人として、その非常時中の非常時に際し、切にわが為政者並に同胞のみなさま方に知つて頂きたい』(14～15 頁)と、積極的にアピールしていく。しかもそれは、次に引く通り、伝統に連なる営為でもある。

日本文学の伝統は、「ますらをぶり」と「もののあはれ」にあると云はれてをります。「ますらをぶり」とは、非常時をおそれない精神、戦ひにひるまぬ男々しさであります。「もののあはれ」とは、移りゆく現実を直視して、そこに人間の偽りなき姿を発見することです。万葉と源氏によつて代表されるこの二つの国民文学的血統は、日本文学を、今こそ奮ひ立たしめるのであります。

文学の側衛的任務とは、決して、文学者の遁避や躊躇を意味するものではなくて、寧ろ、文学の本質と伝統に即した貴重な使命を意味するものであります。(15 頁)

こうして、大政翼賛会文化部長に就任した岸田が矢継ぎ早に発信した〈文化〉論は、昭和15年のうちに、はやくもその輪郭を整えていく。それらに通底しているのは、たとえば『文化の新体制』(大政翼賛会宣伝部、昭16)において岸田が次のように問題化していた、「文化」という用語・概念に対する問い直しであったことは、ここで改めて確認しておきたい。

「文化」といふ言葉は、今までごく手軽に使はれて来ました。しかし果して「文化」とはどういふことでせう。今まで多くの人は、ただ「文化」といふ言葉のもつ、漠然とした感じを胸に受け取つてみただけで、文化の本当の姿を突きつめて考へてみたことはなかつたのです。これは少くとも今日まで、自覚された「文化」といふものが、国民生活の隅々に行きわたつてゐなかつたからです。(1～2 頁)

こうした理念は、岸田にしてみれば、まずもってゆきわたらせいものであるにもかかわらず、その達成が困難であることについて、岸田國士・三木清・津久井龍雄「文化問題を語る」(『日本評論』昭15・12)においては、次のようなささか滑稽なやりとりもみられた。

岸田 〔略〕僕は先づ文化部面——と言ふと非常に範囲が広いし、それ／＼の部門に分れてゐるが、併しそれ／＼の専門部門の機能を發揮して日本の文化を向上させるといふやうな仕事をしようとするにしても、その土台になるものはやはり政治に文化性がなければならぬ。それだけが独立して政治から離れていゝといふことはない。どうしても今までの政治に文化性がないといふことを先づ改めて行かなければならぬと思ふ。今までの政治が民衆から離れてゐることの一つの大きな原因は、政治に文化性がないからだといふことを言ふのだが、それがどうも通じ難くて何も言へなくなつて来る。

三木 そこを何回も繰返して言ふことが、岸田さんの仕事ですよ。

津久井 それが実行されるといふことは難しいことかも知れないが、繰返して主張するといふことが必要である。(180 頁)

総じて、岸田は大政翼賛会文化部長就任を機

に、「文化」という用語・概念の根源的な問い直しからはじめて、政治に文化性を備給し、狭義の専門家が担ってきた文化を、ひろく国民が担うべきものとして位置づけ直し、文学（者）については側衛的任務の重要性をアピールした。いずれも、高度国防国家体制の構築を前提とした議論であり、それゆえ岸田の〈文化〉論は、戦争を遂行する国家への貢献を、国民に要請する一面をもつものでもあった。

2-3:

翌昭和16年になると、岸田國士はタイトルに「文化」を掲げ、後に《大政翼賛会文化部長、岸田國士のさながら講演集のごとき》²¹とも評された『生活と文化』（青春出版社、昭16）を上梓する。まずは、その「序」（全文）を引いておこう。

「文化」といふ言葉に、私は少し食傷しはじめた。こんな生な言葉を仕事のやうに使つてみると、空恐しくなる。日本国民の心あるものは、従来の指導者たちの精神的貧困に対し、暗黙の抗議をし続けて来た、その結果が「文化」といふ合言葉の氾濫になつて現はれたものと私は解したい。ところが、翻つて、抗議する側の、同じことを同じ調子で繰り返すかへす半身不随の症状にも、大に警戒しなければならぬ。

「文化人」と称せられる「文化」の領域の専門家の多くも亦、ある意味に於る非文化的存在たることを暴露する時が来たやうである。

すべては誰の罪でもなく、また誰をとがむべきでもない。われわれは、かゝる時代を背負ひ、忍耐をもつて生きぬくことが必要である。新しい日本の建設は、誰もが考へつかないやうな基礎の上に、着々と進められつゝあるのだと私は信じてゐる。

今村忠純は、この「序」が《本書の内容との

つりあいを欠いている》ことに注目し、その理由を《「序」が本書の内容を補完しているからであり、つまりは本書の内容が十分に示していないことを「序」は語っている》のだと捉え、《一見穏やかな「序」文の背後に、なかば佞屈した心情をひそめて、はやくも文化部長岸田には、思いのほか徒勞の影が色こい》²²と指摘している。同書に収められた「勤労と文化」（初出未詳、引用は『生活と文化』による）において岸田は、《翼賛会としては、生活といふものの全体を一つの文化的見地から検討して、現在の国民生活のなかにある弱点を是正して行くと同時に、生活全体を大体三つの観点から建直して行きたいといふ方針》を示し、《第一に生活をもつと合理的にする》、《第二に、もつと健康性を与へる》、《第三に、趣味的に向上させる》（208頁）という指針を示している。本節では、同書所収の議論を中心に、岸田の〈文化〉論を検討していきたい。

《翼賛会の文化部としては、現在まで政府が実行して来た文化政策といふものの全体に亘つて、一応どういふことが今日までなされて来てをり、またそれがどういふ結果を生んでゐるか、更にまた政府がどういふ方向に導いてくれ、ば、一層国民全体の間に文化が向上するか、さういふやうな問題に就て研究をしてをります》（155頁）と、文化部の活動を紹介する岸田は、「大政翼賛会と文化問題」（初出未詳、引用は『生活と文化』による）において、《大体政治にしろ、経済にしろ、外交にしろ、軍事も含めて、それは一国の文化の一つの現れであると見てよろしい》と、〈文化〉の範疇をおしひろげながら、《さういふ意味の文化は、結局国の力そのものといふことにもなる》（156頁）のだとその意義を強調していく。また、《私はこの度、大政翼賛会文化部の仕事を引受けることになつたのであるが、引受けてみて、さて驚いたことは、「文化」といふ言葉がそれぞれの方面でいかに違つた意味にとられてゐるかといふことである》（145頁）と書きおこされる「新文化建設の方向」（初

出未詳、引用は『生活と文化』による)において岸田は、《なんとなく、今日までの政治には所謂文化性が稀薄であつたといふ感じがする》、それは《国民生活の実体を支配する政治力といふものが、文化の真の姿を反映する精神的高さに欠けるところがあつたため》(147頁)だと、従来の文化のありかたを批判し、次のように《弱味》を指摘していく。

日本には立派な文化の歴史があり、今日もなほ、優秀な文化感覚をもつてゐる国民の一つであるが、悲しいかな、一人一人のうちにその感覚が生きてゐず、創造の芽が眠つてゐるのである。従つて過去のある時代に於るやうに、国民の特質が渾然とした一つの大きな力になつてゐないところに、現在のわれわれの弱味があると申してもよろしいのである。(150～151頁)

ここで論じられた日本国民の潜在的な能力について、岸田は「文化とはどういふことか」(『女子青年』昭16・6)でもふれている。同論でも、《文化といふ言葉が、いろいろな意味で使はれてをり、また場合によつては非常に誤つた意味にも使はれてゐる》(56頁)という認識を示しつつ、岸田は《文化といふものゝ内容》を次の《三つの要素》に整理する。

一つは倫理性(道徳性)、それから科学性、もう一つは趣味性又は芸術性と、この三つのものがバラバラにあるのではなくして、この三つのものが渾然と融け合つて文化といふものを形づくつてゐるので、三つの要素の何れかゞ欠けてゐると、その文化は健全な文化とはいはれません。或はまた、それ等の要素には高い低いがあります。同じ倫理性といつても、高い倫理性と、低い倫理性とがあります。たゞ倫理性があるといふだけで、文化の優秀を誇ることは出来ません。その各々が高い標準にあると

いふことが必要であります。(57～58頁)

その上で、《私の考へでは、文化といふものは大体、人間がその理想を追求するために作り出す生活表現であるといふ定義を、正しい定義だと思つてをります》と述べる岸田は、《人間といふ言葉》を《何れの民族か、或は何れの国家に属してゐる》ところの《国民》だと定義し、《今日、日本の置かれてゐる立場を考へますと、さうしてまた同時に今日私達が生活の構へとして、日本の運命について考へなければならぬ大きな問題を持つてをる》という条件をみすえ、《文化といふ問題も、国民として、その理想を追求するといふ意味から、国民がいろいろな形で発揮する力といふものは、これは悉くその国民の文化能力といふものが土台になつてゐる》(59頁)として、《生活＝文化》の意義を強調していく。

また、「新文化建設の方向」で論及された《弱味》については、「楽壇新体制に備へて」(『会館芸術』昭16・5)において詳論される。《文化の問題》に関して《現在の日本の状態》に《四つの弱点が考へられる》という岸田は、《国民生活のうちに現代の文化として誇るに足るやうな要素が浸潤してゐないこと》、《文化活動の大部分が、今日までの最近数十年におきましては、殆んど民間だけの手にゆだねられてゐたこと》(33頁)、《いろ／＼な文化部門の相互の連絡が十分でなかつたこと》、《従来は同じ専門部門に属するものゝ間におきましても、何らの理由もなく、否むしろ非常に些細な理由のために相対立し合ふといふ状態が今日まで度々繰返され、また現に今日でも続いてゐる》(34頁)こと、の4つをあげている。

こうした現状把握に基づき、岸田は主に3つの方向で打開策を提示していく。

第一は、文化政策である²³。《一般に文化といふ言葉で指示されてゐる教育とか、宗教とか、科学とか、技術とか、医療設備とか、あるひは民衆娯楽だとかを意味し、それについて翼賛会

の文化部がこれからどんな政策を樹てゝ、どんな活動をするかといふこと》を文化部の活動内容として検討する「文化政策展開の方向」(『大陸新報』昭16・1・1)において岸田は、《広狭二つの意味を区別して置くことが必要》だとした。《広い意味のものは簡単にいへば国家百年の文化政策を樹立すること》、狭い意味では《国民生活の文化的側面をもこの高度国防国家体制に即応させることが必要》だと整理する岸田は、とりわけ後者を重視し、《当面の課題》として次の三つを掲げる。

第一は、文化機構の再編成とその指導といふことである。これは民間のいろ／＼な文化団体の実質的な仕事を、積極的に国家目的に統合するとともに、このために必要ならば諸団体の改組調整を行はせることである。〔略〕

第二は、上述のやうに文化の各領域の根本問題に深い省察の眼を向けながら、これと並行して現在速かにその解決を要望されてゐる重要問題、すなはち国語問題、対外文化事業及び宣伝、児童文化の問題、婦人問題、学生問題等の諸問題については、一方所管官庁の当事者と緊密な連絡を執りながら同時に他方民間の良心的な識者の意見を十分に徹してこれを総合統一して可及的にその解決の方向を指示する考へである。

さて、最後に最も緊急な焦眉の大問題は、いま、我々日本民族が直面してゐる非常時局、この偉大な試練期における国民士気昂揚の問題である。この問題の要点は『民衆心理の動向を適確に把握する』といふことである。(6面)

ここで岸田は《非常時局》を強調するが、そうである以上、ことは国内にとどまらない。

ここに、第二の、日本文化が《世界文化の母胎》たるべきだとする岸田の〈文化〉論が顕在化する。「文化政策展開の方向」の延長線上に、

これまで検討してきた〈文化〉論とも交錯する「国防と文化の相関——(一月二十四日放送講演)——」(『文学界』昭16・3)がある。《東亜の指導民族をもつて自認するわれわれの現代文化が、真に指導性をもつか否かは、日本の歴史のみが保証することはできません》、《今日只今の日本人は、職域の如何を問はず、老若男女を問はず、唯の一人と雖も、日本人の日本人たる所以、即ち高い豊かな、力強い文化の創造者たる責任を忘れてはならない》と述べる岸田は、そのために必要な指針を、次のように示す。

さしあたり、いはゞ「軍隊的なもの」を、まづわれわれは、身につけなくてはなりません。正しい意味に於ける「軍隊的なもの」は、国防国家にとつて、欠くべからざるものであります。なぜなら、軍隊ほど、秩序の力と美しさを尊ぶものはないからであります。そしてそこには、文化を形づくる要素が、偶然、四つとも備はつてゐるのです。即ち、倫理性、科学性、政治性、それから芸術性がそれです。

国防国家といつても、必ずしも国全体を軍隊化することではありませんけれども、ある意味で「軍隊的に」組織づけ、秩序立て、訓練し、動かしていくことは、絶対に必要であります。(32頁)

いささか問題含みの例示ではあるが、これもまた岸田〈文化〉論の重要な一面である。さらにいえば、ここには日本国民が東亜地域の《指導民族》だという前提があり、近代以降の《西欧的教養》との関係の来歴を振り返りながら、岸田は次のように言表していく。

日本の歴史を通じて、時代時代に形の上の移り変りがありますが、あれほど、人間的滋味を発揮した日本的な「たしなみ」が、この昭和の聖代に、なぜ、その影を消したかのやうに見えるのでありませう？

それは西欧的教養が、未熟のまゝ取り入れられたからであります。又、封建的な躰けが、一方そのまゝ若い時代へのしかゝつたからであります。この二つの現象は、明治末期から今日へかけて、すくよかに発展すべき日本文化を、混乱させ、荒廃させました。そんな訳ですから、若し日本の近代化が先づ軍備より起り、民族の特質が先づ国軍の結成の上に集中し、国家活動の重点が、勢ひ武力の宣揚におかれなかつたならば、今日われわれは、恐らく、世界の半ばを敵とすることはできなかつたでありませう。(33 頁)

同様の議論は、「日本人のたしなみ」(初出未詳、引用は『生活と文化』による)でも展開されている。《「たしなみ」といふことはわれわれが知つてゐなければならぬことを知つてゐることであり、また美しいものを美しいと見、正しいものを正しいと考へるのが「たしなみ」で、「優れたたしなみ」をもつ国民が高い文化をもつ国民」だと断じる岸田は、《高い科学性と倫理性と芸術性をもつ文化が優れた文化》なのだと主張する。さらに、日本本来の文化を《「たしなみ」という一語に託し、次のように西洋文化を批判している。

「たしなみ」といふものを訓練によつて与へなければならぬ。これが明治の終り頃から非常に忘れられて来たやうですが、当時西洋から盛んに新しいものがはひつて来て、青年の間に古いものに反抗しようといふ風潮が現れた。そして古い伝統のなから本当によいものまで失つたやうに思はれます。「たしなみ」がなくなつたのだと思ひます。(106～107 頁)

こうしたソフトないい方から、「文化への要望 翼賛会実践要項から」(『読売新聞』昭 16・8・27 夕)における、《新しい国民文化の建設

は結局日本人が本来の日本人の姿に還るといふことであると同時に、かゝる姿に立ち返つた日本人こそが東亜諸民族の指導的地位に立ち得るといふ信念をもつこと、そのために我々国民が協力して達成すべき事業はいま着々翼賛運動の具体的な指標として示されつゝあると思ふ》(3 面)といったハードないい方まで、《世界的文化の母胎》たらんとする岸田〈文化〉論の、帝国主義的な一面が垣間見える。

最後に第三として、昭和 10 年代後半に盛りあがり戦後につづく、地方文化論がある。

《今日、国民文化の向上といふ問題を考へる時、真に新しい意味と性格をもつた文化運動といふものが考へられる》という岸田は、「地方文化の新建設」(『知性』昭 16・7)において、国民文学論 - 国民文化運動と連動した次のような状況を積極的にすくいあげている。

それ〔地方文化〕についてわれわれは、一般専門的な分野に於ける文化人が、特にこの問題の解決に協力し得るやう、最も便利な組織をつくることの必要を感じ、目下着々その準備を進めつゝあるのであるが、地方に於ては既に昨年秋頃から全国を通じ各地にこの機運が起り、ある所では全く民間の自主的な動きとして、またある所では地方官庁または翼賛会支部の主唱によつて、それぞれ新しい文化団体の結成を見つゝある。(60 頁)

また、「戦時下に於ける文化運動の意義」(『館山文化協議会機関誌』昭 16・8 = 未確認、引用は『四国文化』昭 17・1 による)でも岸田は、《この時局下に於ける文化運動の意義は、それが運動として国民的性格をもつ以上、飽くまでも物質、精神両方面に亘る「生活力の強化」を直接目指すにある》として、《それが為めには、政府の施設及大政翼賛会の方針に基き、全国各地域の文化団体は、その企画を統一し、あらゆる専門分野の連繫によつて、適切有効な実践運動

を展開しなければならぬ》(1頁)と、岸田〈文化〉論と連携させた具体的な運動が目指されている。もとより、ここでもキーワードは生活で、その意味で岸田の〈文化〉論は一貫しており、《大衆》を《国民》へと換言した)大衆文化論でもある。

以上、昭和16年に展開された岸田の〈文化〉論を、整理しながら分析・読解してきたことになるが、その総括とも目される岸田の発言が、松本潤一郎・岸田國士・三木清・大串兎代夫・津久井龍雄・穂積七郎・室伏高信「文化の運命」(『日本評論』昭16・12)にみられる。それは、「文化」という用語・概念それ自体を問い直すような、次の発言である。

文化といふ言葉の流行といふ所からいへば、これは言葉だけが流行することでもないけれども、やはり戦争に依つて文化が脅かされるといふ、さういふ不安が一番基礎になつて居ると思ふのです。それに対して文化の破壊戦争——文化の破壊ぢやない、建設だといふ議論が出たり或は戦争は文化の母体でもあるといふやうな議論が出たりするといふやうな所から文化が戦争と結付けて、多くの人の関心を引き始めた。さうしてその人も自分の仕事と関連して——仕事の面と関連して、さうして無意識的に文化擁護の立場に立つ側から文化といふ言葉が段々分派して行つて居るのではないかと思ふのです。(225～226頁)

《戦争》という条件を重んじる岸田は、その延長線上で、〈文化〉という用語・概念の再編成を企図しながら、大政翼賛会文化部の活動に即して次のような目標を示している。

文化といふ言葉が新しい日本語としてはつきりした概念とイメージを作つて行くまでには相当暇がかかる。だから例へば翼賛会に文化部といふものが出来た。この文化

部の文化は一体何だといふと誰も分らないのです。分らないといふのは、詰り何語から翻訳した文化なんだといふことがあるのではないかと思ふのです。それは銘々自分流に皆が考へて、文化部といふものはかういふものだといふ一つの仮定を作つて居る訳です。〔略〕私の考へたことは、ドイツ語でもない、フランス語でもない、英語でもない、日本語の文化といふものを文化部で拵へなければならぬのだといふことを考へました。(226頁)

ここでいう《日本語の文化》ということの内実について岸田は、《民族を価値づけるもの、これが文化だ》、《価値づけるといふことは如何なる国で価値ありとするかといふことに依つて文化の性格が出て来る》(229頁)と、端的なかたちでその定義を明示してもいた。

総じて、岸田による日本文化論には、アジア・太平洋戦争下、つまりは世界の中の日本の位置づけが意識的に刻まれている。そのことを岸田は『文化の新体制』(前掲)において、《日本には昔から立派な独特の文化》があることを前提として、《この香り高い日本文化の伝統をもう一度現代の生活のなかに生かし、一方海外文化の長所を吟味採択し、その上に立つて、ほんたうにわが民族の天賦を誇り得る、東亜新文化の樹立を先づ完成することが急務》(6頁)だという危機意識に即して表現し、さらに次のような主張を展開していく。

われわれは、現に遂行しつゝある戦争といふ大事業を完成するために、われわれの既にもつてゐる文化の力を有りつたけ活かして使はなければなりません、更に、明日のより大きな国家的役割を果たすため、今日からもうその準備に取りかかつておこななくてはなりません。それは、いふまでもなく、世界的日本の地位にふさはしい雄渾にして高雅な国民文化の素地を作りはじめる

ことであります。(15 頁)

こうした、〈文化〉を生活というレベルで広範なものとして捉え直した岸田は、〈文化〉を再定義しながら国民に普及させ、そのことによって日本文化を《世界的文化の母胎》たらしめんとしていく。これを、逆のベクトルから考えれば、〈文化〉という回路を通して、国民はあまねく《国家的役割》を果たし得る／果たすことを望まれる存在へと再設定されたことになる。ここに、〈文化〉論の射程が国民・生活に及んだことの功罪も宿る。

3：昭和 10 年代における〈文化〉論の展開

3-1：

本節では、昭和 10 年代初頭において、〈文化〉がどのように議論されていたか、前節での岸田の〈文化〉論に重ねながら素描し、同時代の〈文化〉論を多角的に検討していきたい。

まず、『経済往来』から改題した『日本評論』が掲げた、安倍能生・長谷川如是閑・室伏高信・今井登志喜・宮澤俊義・和辻哲郎「『日本文化』を再評価する談話会」(『日本評論』昭 10・10)における和辻哲郎の議論を参照しておこう。《純粋な固有文化といふやうなものは、何処にだつてありませぬよ》(69 頁)と断じる和辻は、純粋な日本文化など存在しないことを、《非常にいゝ方をいへば、日本人は受取つた文化財の有つて居る価値を非常に純粋なものにすることが出来る》、《宗教でも芸術でもその中の純粋なものを取り出すことが出来る、これが一番いゝ所といへるでせう》(75 頁)と肯定的に捉え直してもいた。また、和辻は《日本的といふことは、支那にないものが日本的だといふんぢやない、支那にあるものを持つて来てそれを純粋化することが日本的なんで——》(76 頁)とも述べており、(西洋ではなく)支那から多くの文化を取り入れてきたことを明言していた。同誌同号には、三枝博音「日本文化の特質」(『日本評論』

昭 10・10)も掲載されており、そこでも《日本的な文化以外のあらゆる文化を摂取し得るといふ特殊性を持つた》(103 頁)と、排他的かつ純粋な日本文化論がそれとなく封じられ、こと中国との文化交流が強く意識されていた²⁴。

一方、西洋文化(フランス)と日本文化の関係を論じる書物もある。《仏蘭西的な知性の香気と、日本伝統文化への反省にもとづいた思念の豊かさがいみじく結合してゐる》(広告「佐藤信衛 文化のため」、『文学界』昭 13・11、頁表記なし)と紹介された佐藤信衛『文化のため』(日本評論社、昭 13)では、次のように日本文化の現状が捉えられている。

私たちが今日になつてもうよほど西洋文化を理解したやうに通がつて言ふけれど、どうせ何かへんなところを掴んでゐるに相違ないので、私たちの心からの言葉は硝子の中の過去が語つてゐる。それが聞き取れなければ、聞き取れるまで耳を養はなければならぬ。ここに私たちの文化の——また新しく起るべき文化の——限界があり模範がある。〔略〕私たちはどちらかと言へば欧羅巴人であり亜米利加人であることが多からう。そのやうに、過去の日本と今の私たちの間には時勢の穿つた深い溝ができてしまつてゐる。(118～119 頁)

こうした理解は、佐藤と世代・教養を異にする安倍能成の『時代と文化』(岩波書店、昭 16)にも、次のような一節が読まれることから、一定の妥当性をもっていたと考えられる。

西洋の文化や思想は、明治以来七十年の歳月を経て、我々の中に次第にはひつて来、我々はもはやそれなしには生活することが出来ぬやうになつた。西洋の文化や思想は或る程度まで我々のものになつて来た。〔略〕我々の今後の文化や思想は、西洋思想を排斥することによつて生れるのではな

くて、西洋思想を批判的に受け容れ、これを我々のものとすることによって生れるのである。(237 頁)

明治以降の日本文化における西洋文化の影響・位置づけは、昭和 10 年代を通して問題化されていくが、そのことは〈文化〉論を産出していく動因となっていたように思われる。こうした中、〈文化〉論が隆盛をみていくのは、近衛新体制に連動した昭和 15 年からである。文芸誌上においては、次に引く無署名「新潮評論 新文化誕生のために」(『新潮』昭 15・1)のように、国家事業としての位置づけとともに文化人の役割が議論されていく。

一流国としての尊敬を勝ち取るためには、我々はどうしても一流の文化を持たねばならぬ。このどうしても持たねばならぬ文化の達成には、政府も金持ちも、支出を惜しんではならぬのである。しかも、その支出は、日本が一流の文化を持つて、一流国としての取扱いを受けるといふやうな大報酬のほかには、報酬を期待してはならない。むろん、その大業を委される文化人も、一身を顧みず、国家の大業を果すといふ固い決意と、自負とをもつて、着実に踏み出すべきである。(362 頁)

同時期の座談会、和辻哲郎・柳田國男・今井登志喜・長谷川如是閑・大西克禮「日本文化の検討」(『改造』昭 15・1)においては、《日本人は始終長いこと千年以上外国文化の影響を受けたから、自らその鍛錬が出来て、他所の文化に向ふときに相当に批判的になつたのだ、と思ふ》(143 頁)と、日本文化に外国文化の影響を認める今井に対し、柳田は《今後の文化をもう少し独自の日本的なるものにしようといふのには、今の右傾派の言つてゐるやうに、少し極端でもいいから、外国の模倣をやめる》、《さうして欠乏を感じしめる、空虚を感じしめる。そ

の間に大きくしよう》(151 頁)と排他的な戦略を示していた。とはいえ、〈文化〉論が一直線にナショナリズムへと向かったわけでもない。翌月の無署名「新潮評論 日本文化の近代性」(『新潮』昭 15・2)では、《世界の情勢が、国際的な雰囲気から、徐々に国民的、民族的な方向に向ふに従つて、日本文化もまた徐々に国内的、民族的な方向に向つてゐる》、《そのために、日本を今日まで発展させてきた近代性が、ともすると軽視されがちとなつた》(267 頁)という現状認識が示されている。ここにいう《近代性》とは西洋文化を指すと思われるが、さらに同論は《日本文化の近代性の一つの弱点は、外来文化に対する反動に中心がなく、反動に批判力が伴つてゐないといふことに帰するであらう》、《近代性が近代性それ自身として自国的に発展せられずに、外来の文化のままで踏襲されるといふ現象が、いたるところに見られる》(269 頁)とつづき、次の結論へと至る。

日本の戦争目的が明らかにしてゐるところは、東亜共同体の建設にある。〔略〕その意味から言つても、我々の文化性の目標は超近代文化への発展であり、その意味の超近代文化はヨーロッパ文化全体を近代文化プロパーとしたものの上に、築かれた東亜新文化でなくてはならない。(270 頁)

つまりは、この戦争を肯定・遂行しながら、〈文化〉においては西欧近代の文化をとりいれつつ、それを伝統的な日本文化に適切に組みこみ、そのことで構築される《東亜新文化》を目指す、というのが上の議論のエッセンスといえる。後年の「近代の超克」を容易に想起させるこうした論理構成は、すでにこの時期、和田清・後藤末雄・松田壽男・岩村忍・江上波夫・石田幹之助「東洋文化と西洋文化」(『大陸』昭 15・7)にもみられる。《東亜が孤立してをつた時代には東洋の主人公は支那だつた》、《ところが、今日は日本が東洋の主人公になつてゐる》とい

う覇権の交代を指摘する和田は、次のように西洋に論及していく。

日本文明といふものがある程、其は最初は微弱な物と思ふのですけれど、元からあつたのですね。それは他国から荒されないで、そうして段段に太つて、徳川の末までに偉大なる日本文明といふものが出来てゐるのです。それだから西洋文明が殺到して来ても西洋になつてしまはなかつたのです。〔略〕しかし、今のところはどんなことを云つたつて西洋の方がずっと上ですから、西洋文明を消化するために、西洋文明を根こそぎ摂つてしまふより他ない。それを好い加減にやめておいては負けてしまふ。向うのいいものを全部摂つてしまつて消化すれば、その裡にこつちの特色が出て来る。〔略〕日本は独特のものを有つてゐるんだから、それを採用して、それが日本のものになつて来ればえらいものが出て来る。日本精神はさういふものを包容するところに、日本精神たるの所以がある。(174～175頁)

こうして、昭和15年の〈文化〉論においては、外国文化（支那／西洋）と伝統的な日本文化を弁証法的に止揚した地点に、日本の新たな〈文化〉が構想されていく。それは、《スタイルもなければ、秩序と名づくべきものもない》(34頁)と日本文化の現状を難じ、《現在の日本人の日常生活に於ける統一化の問題こそ焦眉の問題》(35頁)だと指摘する「国内文化の刷新」(『改造』昭15・5)の清水幾多郎においても、《東亜の新秩序は日本国民の日常生活の新たな統一を大きな支柱とする》(35頁)というかたちでなぞられていく。

あるいは、「新文化体制の建設」(『改造』昭15・9)という特集テーマ名をみても、《文化》、《建設》といったキーワードには、時代の思潮とともに岸田〈文化〉論との共振がみてとれる

²⁵。以下、同特集の内容を瞥見しておこう。土屋喬雄「文化科学の振興」では、《総力戦の今日、文化科学も、むしろ国防科学そのものの一部門であると考えなければならぬ》(72頁)と、〈文化〉がひろく捉えられている。中島健蔵「一元化と単一化」においても、《一般に、文化といふものを、実生活の外側に附加された装飾のやうに思ふ俗解》を排しながら、《政治も経済も、機械工業も、広くは文化の中に包括される人間活動にほかならず、それが特に文化の名を以つて呼ばれる場合には、それ等の専門的諸活動と、人間生活との結びつきを指す》(79頁)のだと、ひろい意味での〈文化〉が定義されていく。和田傳「新体制と農本文化」では、《西欧精神に対する日本精神と言ひ、都市文化に対する農村文化と言ひ、ひとしく長い間見失ひ喪失してゐた自身の価値の再発見であり、再検討》だという認識が示された上で、特に《農村文化》について、《都市文化と対立的なものとして考へるべきではなく、むしろ新しき今後の日本文化の母胎若くは地盤として考へるべき》(86頁)だと、地方文化を《母胎》という岸田〈文化〉論のキーワードを用いながら積極的に意味づけている。上泉秀信「国内新体制と娯楽文化」では、《娯楽文化が国民の文化生活のために存在するものであるならば、まづ娯楽の公共性を首位に据ゑなければならない》、《国民の文化生活のために、文化政策が確立されなければならぬ》(90頁)として、娯楽を題材にしながら、“文化＝生活”の主人公として国民が位置づけられている。いずれも、岸田〈文化〉論と問題意識・キーワードを共有する同時代の議論であることは明らかである。

また、問題関心を通底させながら、少しく異なった角度からの議論として、谷口吉郎・諸井三郎・芳賀檀・中島健蔵「文化政策について(座談会)」(『文学界』昭15・9)も参照しておこう。第一に、岸田〈文化〉論を追認・拡声する、次の中島の発言をみておこう。

今日の場合、どうも日本では文化といふと何か生活の外側にあつて、政策的にも外から附加へられる……、文化といふものが何か贅沢品の様に見られる傾向がまだ強い。しかし、真の文化は非常に広い意味を持つて居るので、政治も経済も文化現象の中に入る訳であるし、またいろいろの方面の人間活動の中には、たとへ外見上いはゆる文化的でなくても、内的に文化に属するものが何処にでもある訳である。(216 頁)

こうしたフォーマットとでも称すべき岸田〈文化〉論の基盤上で、諸井は、《日本的といふ事は、どういふ事か》について《唯古いものを焼直すといふことでは駄目だといふ事は一般にも承認された事だ》(233 頁)という現状を確認した上で、次のように述べていく。

それでは今後生まれてくるべき日本的なもの、即ち吾々の独自のものはどういふものかといふ事になるが、これは何も型を作る必要は無い。x と考へて一向差支へない。われわれは今此の現実の中に生きて行きつゝ、感ずる事、考へる事、希望する事、――それを芸術の上に表現して行けばいい。その努力の内に段々日本の独自性が明かになつて来る。ある型にはめこんでこれが日本的であるといふレッテルを貼る事は無意味だ。(233～234 頁)

積極的な方法論や操作の提示がない点が、諸井発言の特徴である。これは裏を返せば、基盤となる日本文化への強固な信頼が仄見え、日々の生活を営んでいく中から、自動的に《日本的なもの》が生みだされるはずで、それこそが《日本的》だということになる。

こうした一連の〈文化〉論を、日中戦争の位置づけとあわせて総合的に示していたのが、三木清による「文化の力」(『改造』昭 15・1)である。《日本文化の力は第一にその偉大な同化

力にある》と断じる三木は、《外国文化の長所を加味し総合することによつて作られた国際的或ひは世界的文化であつて却つて外に向つてその力を發揮するに適してゐる》のであり、それゆえに《日本の文化がそのすぐれた同化によつて支那に先立つて西洋文化を取り入れて現代化され世界化された》(116～117 頁)と、日本(文化)の優位性を説く。もちろん、《我々の文化は東亜文化の伝統はもとより西洋文化の長所をも摂取して偉大にならなければならぬ》(119 頁)というかたちで、三木は異文化の摂取による弁証法的な日本文化の強化にも積極的である。また、三木は、《日本の文化は先づ東亜諸民族の文化に対して親切になることが必要》だとして、《日本固有の文化といふものを彼等に強要しようとしたのでは、文化の力は發揮されぬ》、《彼等の文化の伝統をそれぞれ尊重することが大切であると共に、日本文化のうちに彼等の文化の長所を収容同化してゆくことを考へねばならない》(120 頁)と、文化理解に関する配慮や操作を示しながら、迷わず東亜共同体の先頭に日本を位置づける。こうした主張を支えているのは、《私は西洋文化を世界文化と同一視するいはゆるヨーロッパ主義に対する批判を掲げ、「東洋の統一」が却つてこの事変の世界史的意義であり、これによつて初めて世界が真に世界的になるのであると述べた》(121 頁)という、三木による支那事変の位置づけ(《世界史的意義》)による。つまり、西洋に対峙する東洋を構築するために、支那事変を通じて「東洋の統一」を正当化するという強固な論理である。

以上、本節で検討した〈文化〉論に通底するのは、外来文化を適切に取捨・選択・摂取、次第に独自なものへと成型していく装置としての日本文化の高い機能性への信頼である。こうした特質によって、東洋における覇権を中国から奪取することに成功し、東洋を代表する《東亜新文化》を担う日本文化に、西洋と対決すべき《世界的地位》が見出されるのだ。

3-2:

昭和15年10月に大政翼賛会が発会となり、文化部長に岸田國士が就任すると、そのことを契機としながら、岸田國士や〈文化〉についての言表がさらに産出されていく。文化部が設けられた当初、『何をやつたらよいかとふことについては、その時まだ翼賛会の最高幹部にもはつきりしてをらなかつたのではないか』と回想する、文化部の初代副部長をつとめた上泉秀信は、『文化の様相』（大日本出版、昭17）において、ドイツの欧州戦争における勝利に文化政策が関与した事例を引きながら、『日本の政治家の中にも文化の力がそれだけ必要だといふことが漠然と感じられて来たのではあるまいか』（41頁）と想像していた。

もとより、X・Y・Z「スポット・ライト文化の価値」（『新潮』昭15・10）で紹介されたように、『文化といふことを、すぐに爛熟とか、頽廃といふこと、結び附けて、ややもすれば文化を排撃したがる人々が多いのは、困つたものだ』（12頁）といった現状もいまだあり、『時局下であるとは言へ、ややもすれば文化価値を低く考へたり、輕蔑するやうな考へ方をするのは、戒心すべきだらう』（13頁）という提言がなされてもいた。

ただし、こうした言表もまた〈文化〉論には違いなく、大河内一男が「「文化」問題と「転業」問題」（『朝日新聞』昭15・11・30）で端的に指摘するように、『何れの雑誌もこぞつて「文化」の問題をとり上げてゐることは、いまや「文化」の問題がその重要性を益々人々に意識せしめつゝあるといふことにもよるが、大政翼賛会文化部長岸田國士氏個人に対する国民の関心と期待との表現』だという状況が現出する。さらに大河内は、『十二月号の総合雑誌は「文化」問題特輯の感がある』（5面）とも付言しているが、岸田が関わった主要記事を掲げておく。

岸田國士・河上徹太郎「大いなる構想」（『文

藝』昭15・12）

岸田國士「文芸の側衛的任務」（『文学界』昭15・12）

「岸田國士・島本健作対談」（『中央公論』昭15・12）

岸田國士／質問：河上徹太郎「政治の文化性」（『文藝春秋』昭15・12）

岸田國士・三木清・津久井龍雄「文化問題を語る」（『日本評論』昭15・12）

岸田國士・上村哲彌「対談 新国民文化の検討」（『公論』昭15・12）

いうまでもなく、〈文化〉がキーワード・主題となり、文字通り〈文化〉論はブームと化していくのだが、大熊信行は「文化政策の問題」（『公論』昭16・1）において、『言葉を疑ふといふことは、実にあらゆる問題に関する本質的な思考の発端なのであつて、それはまた思惟の生産性を語る兆候』だとした上で、『いまやそのやうな意味で、われ／＼は文化といふ一語の前に棒立ちになつてゐる』、『そしてそのやうな精神の状態におかれてゐる日本の知識層を最もよく代表してゐるものが、大政翼賛会の初代文化部長に就任した岸田國士氏である』（68頁）と捉え、岸田の位置・役割に注目する。その上で、『問題は実に文化とは何かといふこと』だと指摘する大熊は、『かゝる場合に必要なものは、岸田氏が衝きあたつてゐる文化觀念の反省を、もつと明瞭につまり概念的に、表現することのできる能力』（69頁）だとして、〈文化〉論において岸田が体现する『危機の精神』を次のように描きだす。

ひとり岸田氏の最近の言説が、おそらくその置かれたる地位の自覺と、その地位が同氏に加へる政治的現実の圧力とによつて、危機の相貌を呈してゐるのは、もとよりその人の真摯な性格にもとづくところがあるにせよ、人間はその境遇によつて、思想の動く余地のあることを一般に語るものであ

らう。岸田氏は、まさしく追ひつめられた人であり、思想の対決を求められてゐる人である。(70 頁)

そのように評された岸田の〈文化〉論は、《我が国の政治に新しさを齎らすものは何よりも文化政策》(4 頁) だという「文化政策論」(『中央公論』昭 15・12) の三木清によって、文化政策という観点から再論されていく。《文化政策の対象となるのは、文学や美術の如きもののみでなく、また生活文化でなければならぬ》(6 頁) という三木は、《今日の文化政策は、大政翼賛会の岸田文化部長が種々の機会に力説してゐるやうに、政治の文化性に対する要求から始まらねばならぬ。それは単に文化のために必要なことでなく、むしろ政治そのもののために、その明朗性と魅力とのために必要なこと》(7 頁) だとも主張する。さらに三木は、《政治が文化性を担ふためには政治家が文化についての理解をもつてゐなければならぬ》、《それと共に必要なのは、文化人がまた政治に対する理解をもつといふこと》(8 頁) だと、あまねく国民への〈文化〉理解を要請しながら、《国民文化の発達にとって重要なのは地方文化の発達》(11 頁) だという主張も掲げ、岸田への援護射撃を行っていく。

また、中島健蔵「役割から来る権威」(『新潮』昭 16・1) では、《戦争状態に陥つた以上、国防の問題が国家の中心課題になるのは当然だが、広義国防を考へる以上、岸田國士氏のいはゆる側衛的任務の重要性も疑ひを容れる余地がなく、単純に国民を軍隊風に再組織するといふやうなことでは行かなくなるのも当然》(245 頁) だと、「文芸の側衛的任務」の重要性も追認される。《新体制の問題が論壇に於て始めは政治や経済を中心として扱はれて居たに対し、次第に文化の問題が正面に出て来たことは、既に他でも指摘されて居ることであるが、この傾向は十二月の論壇に於て更に顕著になつて居る》と指摘する「論壇時評 文化と雑誌」(『日

本評論』昭 16・1) の船山信一は、《文化人は始めは新体制を政治家や経済人にだけ求めて居たのであるが、やがて、自分らもまた変る必要があるといふ反省に達した》のだと意味づけている。こうし状況ふまえながら、船山は次のように指摘している。

文化部、特に岸田氏を通して自分が大政翼賛会、新体制運動と僅かにつながりをもつて居る又はもつことが出来るやうに考へて居る文化人は決して少くないであらう。かくて、文化人が岸田氏に期待するところが頗る多く、氏を鞭撻するといふよりは、むしろ援け、いたはるといふ気構へさへ文化人の中に見られるのである。(129 頁)

その上で船山は、《岸田氏の意見は多岐に亘つて居るが、然し格別新しいといふものはない》、《いはば現代に於ける良識の代表》なのだと正確に位置づけ、さらに、《岸田氏が国民文化特に生活文化を中心に於て、一方に於ては生活から離れた純粹思想とか純粹芸術とかに重点を置かず、又他方に於ては文化を単なる娯楽から區別して考へて居るのは、文化政策の当事者としても当然ではあるが全く正しいやり方》(130 頁) だと評価し、肯定する。

ほかに“生活＝文化”という論点についても、中村武羅夫が「まづ個人の教育から」(『日本学藝新聞』昭 15・10・25) で、《文化は社会的施設は、社会生活の中にのみあるやうに考へるのは間違ひで、本当の文化は国民の個人的教養や、家庭生活の上になくしてはならない》、《両方の調子がウマく揃はなかつたら、本当の文化とは言へない》(2 面) と述べている。もっとも、井伊重夫「文化政策への希望 政治統制から経済主義への逃避」(『京都帝国大学新聞』昭 15・12・20) が指摘するように、《岸田文化部長の各所に於る言説も、真摯な気構へは分るが、遠慮なしにいへば政治の文化性とか、文化の政治性とかいふ抽象から脱して、文化政策の限界を

先づ確認して欲しい》(2面)という要望も、〈文化〉論が理念の言明である以上、首肯すべきものではある。それでも、年次総括においても〈文化〉論は、一定の評価を得ていく。谷川徹三「今年文化界の回顧(上)理論から実行へ」(『朝日新聞』昭15・12・28)には、〈文化〉論に関して、《第一に、政治といはず生活といはず社会の各般の事象に一層高度の文化性を与へたいといふ要求》、《第二に、文化の各分野の交流を一層緊密にしたいといふ要求》があげられ、《今はもつと身近な問題として要求してゐる》(5面)ことが確認されている。つづく「本年文化界の回顧(下)擁護から建設へ」(『朝日新聞』昭15・12・31)で谷川徹三は、岸田の〈文化〉論を、《文化の擁護なる標語を文化の建設なる標語に更へることができたといふことは、知識層にとって実に画期的な事柄》だとして高く評価し、《「文化の擁護」に於いては人人は政治に対立してゐた。しかし「文化の建設」に於いては主体的に政治を分担してゐる》(4面)と、〈文化〉言説がシフト・チェンジを遂げたことが確認されているが、これらは岸田の言説実践による成果といってよいだろう。

岸田サポーターといつてよい豊島與志雄は「文化政策観点の是正」(『改造』昭15・11)で、《要望される新たな文化が、単に日本だけに於けるものではなく、それが東亜新秩序或は東亜共栄圏の中に於て云はるゝ場合、日本的性格からはみ出して東洋的性格を持たなければならぬ》(72頁)と述べ、文化政策として世界へ進出する帝国日本の戦略を示していた。また、中野好夫は「文化政策へ望む 文芸(上)文学の特殊性」(『朝日新聞』昭15・11・14)において《文化統制といふ大問題は、単に文化部だけで出来る仕事ではなく、寧ろ文化部をその一翼とする機構全体に、文化の使命に対する正しい理解があつてはじめて可能なもの》だという理解を示した上で、《岸田氏とても永久に現在の位置にある人とも限らないとすれば〔略〕文化統制の担当者は絶対に所謂文化関係者の中から

厳選(これが問題だが)せよ、といふことを強調しておきたい》(5面)と述べ、先見的な配慮を示していた。

《大政翼賛会の成立と同時に、同会に文化部が設けられることになり、更にその部長に岸田國士氏が就任することになつて以来、今後の文化或は文化政策に対する関心が急激に昂まつて来た》と近況を要約する「文化政策への期待(一)文化と政策」(『都新聞』昭15・11・17)の窪川鶴次郎は、《これは勿論、大政翼賛会の運動に対する人人の大きな期待の現れであらうが、そこには、部長としての岸田氏が作家であるといふことゝ、その活動経歴とに対する人々の期待が織りこまれてゐるに違ひない》と述べて、岸田その人への期待を読みとりながら、《取締》だけでなく《文化の創造に対する政策こそ、一般文化政策の基礎とならねばならぬ》(1面)と、文化政策への要望を掲げてゐた。つづく「文化政策への期待(四)新たな構想」(『都新聞』昭15・11・20)で窪川は、《現代の文化ほど、文化についての全く相異なる様々な、独立した觀念を含んでゐるものはない》、《新たな文化政策の樹立は先づこの文化觀念の統一化を眼ざさねばならぬ》という理念のもと、《統一化は如何にして行はれるか、これが知識階級、文化人にとつての協力の中心的な課題》(1面)だとして、プロレタリア文学運動以来の「文学の大衆化」ならぬ「文化の大衆化」を訴えていく。

また、文化政策については、松本潤一郎が「現下の文化政策」(『文藝』昭16・6)《文化政策が文化的部面に対して行はれる政策である以上、本来的に国家的政治性を具有すべきであるは、無論のこと》(2頁)だと、いささか楽観的な議論に棹さす一幕もあれば、永戸俊雄は「文化政策の意義と方向 知性的・思想的・内容的たれ」(『三田新聞』昭16・1・1)において、《文化とは何だ、といふことを考へていゝと思ふ》、《文化政策を、とやかく議論する前に、じつくりと、これを考へることの方が、意味がある》と述べて、原理論に引き戻しつつ、〈文化〉を《人

間の教養と同義語であるべき》(2面)だと定義してもいた。

こうした時期に、文芸誌では「国防国家と文化の役割」(『新潮』昭16・1)という特集が組まれる(既出の中島健蔵「役割から来る権威」も同特集内の記事である)。清水幾多郎「国防国家と文化」では、文字通り〈文化〉をひろく捉える岸田〈文化〉論を追認するように、《現在のところ文化の問題は展覧会や博物館のことであるよりも、国民の衣食住のことである》(239頁)という認識のもと、《本当に健全な精神の名に値するものは、自ら考へる精神であり、底の底まで自己の責任を以て考へ抜く精神》だとして、《かういふ精神と立派な身体とが結びつくことが、国防国家完成の条件であり、この事業に参加するところに文化の役割の最も大きな部分がある》(240頁)とされた。池島重信「国防国家における文化の出路」では、《文化主義は周知の通り文化を実生活から抽象するところに最大な誤謬を犯すものであるが、国防国家においては、文化は特に生活文化として把握されなければならない》と、ここでも“生活=文化”という岸田〈文化〉論をひきつぎつつ、《国家の総力が国防といふ最高目的に帰一統合せしめられるためには、文化は「文化のための文化」としてでなく「生活のための文化」として強調されることが必要である》(241頁)と強調されている。河盛好蔵「文化の実践面の強化」では、《文学が国防国家の建設に積極的に協力しうするためには、まづ為政者の文学者に対する心からの尊敬を必要とすること勿論であるが、それと同時に、文学者の側から、文学といふものが国防国家の建設にいかに重要であるかといふことを忍耐強く啓蒙的に理解させることが最も必要》だという認識にたって、《文化の名を以て呼ばれるものが永遠の道に通じる極めて高いものであると同時に、それが実生活の上にかかる現れ方をするか、またしなければならないかを自他に対して具体的に実証することが、またその実証を文化の名に於て真に理解し納得す

るやうに人々を導くことが、あらゆる文化部門の担当者の最大の急務》(244頁)だと述べ、国防国家建設へとつながる文化人の役割を明示してみせた。こうした特集の各論における“生活=文化”という共通項は、今日出海「新しき文化の課題」(『改造』昭16・2)にもみてとれ、《文化は日本民族の生命の自発力の迸りであつて、従来の如き文化人といふ特殊階級人の独占物では断じてない》(118頁)という認識のもと、《文化の各部門を孤立せしめてゐるよりも、相互に交流せしめることが、文化といふ有機体の本来の機能》(121頁)だと論じられている。こうして岸田〈文化〉論は、“生活=文化”というフォーマットをあまねくいきわたらせていくのだが、それは同時に、戦争を肯定する〈文化〉論であることも、くりかえし論及してきたことではある。従って、斎藤瀏「新日本文化建設の理念(下) 国民文化の創造」(『国民新聞』昭16・4・5)にみられる次の見解も、やはりその範疇にあるといつてよい。

日本新文化の建設は即ち、世界的規模に於ける日本民族の拡充運動を枢軸とする亜細亜民族解放戦の根源として一体観思想の浸徹要望と、その文化創造意志とを旺盛にする為め、先づ日本民族の覚醒を根拠とする。

かゝる国民的規模に於ける文化建設運動の展開は東亜諸民族の文化解放運動に対する指標であつてまたその指導権の確立を意味するが故に、やがて世界の史的転換期の現段階においては欧米功利主義文明に対する日本、東亜文化の必勝的闘争とならねばならぬ(8面)

こうした議論のいきつくさきは、日中戦争を遂行中であることを前提とした、国民文化論である²⁶。新明正道「国民文化への構想」(『現代』昭16・7)では、《国民文化の建設が文化人の課題として提出されてゐるのは、時代的に必然

的なまた当然の傾向をなすもの》(76 頁) だという位置づけにつづき、やはり“生活＝文化”論がここでも展開されていく。

国民文化の建設は政府の仕事ではなく、国民自身の仕事であつて、これを推進するには文化的にも国民運動が必要とされることは改めて説くまでもない。我々は此の意味において国民に潜在する文化的な欲求やその自発性を尊重しなければならないことは勿論である。(82 頁)

もっとも、こうした〈文化〉論に対して、批判的な言説がないわけではなかった。《最近頼みに“文化”の二字が本来の意義を発揮し、特別に強い光を放つやうになつて来た》ことに注目する無署名「新潮評論 文化とは何ぞや」(『新潮』昭 16・2) では、《今日唱へられてゐる“文化”はさほど広い意味のものではなく、善き政治に対する一種の女房役のやうなもので、たとへば大政翼賛会の文化部の如きも、かうした点にその存在根拠があるのではなからうか》(2 頁) と、〈文化〉の意義が低めに見積もられ、一見、政治の優位が語られているようにみえる。しかし、同論の結論として《我等は“文化”といふことを、最も高く評価し、広く解釈してあらゆる生活をそれに包容し、政治の文化性でもよいし、文化の政治性でもよいし、そこに理想の現実化を図つて行けばよい》(3 頁) と述べられており、文字通り岸田が提唱した“生活＝文化”論へと帰着していく。してみれば、岸田が各所で精力的に発言していった〈文化〉論は、フォロワーによる拡声効果も含めて、この時期〈文化〉を論じようとする際に、少なくとも前提として参照される程度には張り巡らされていったのであり、いわば岸田〈文化〉論は、論壇に浸透していたとみられる。理念的には文化の政治性／政治の文化性を謳っていた岸田は、身近なレベルでは“生活＝文化”論を展開していた以上、“生活＝文化”の政治性が浸透し

ていったというのが、岸田が大政翼賛会文化部長に就任して以降の〈文化〉論に生じたシフト・チェンジである。このことは、文化の力が政治に及んでいく反面、政治の力が“生活＝文化”にも及んでいくということでもある。つまり、国民生活が、国民の自発的・積極的な参加によって政治の管理下に置かれていくのだ。それゆえ、国民は“生活＝文化”を通じて政治への働きかけることができるが、逆に国家も“生活＝文化”を通じて国民へと働きかけることができるようになる(こうした往還は、〈文化〉論による言説実践を通じて成立している)。してみれば、岸田〈文化〉論とは、「国民」という用語・概念の再編成も含んだ、〈文化〉論のシフト・チェンジをもたらすものだったのだ。

4：大東亜共栄圏と地方文化論

昭和 17 年 7 月、岸田國士は大政翼賛会文化部長を辞職する。後任はドイツ文学者の高橋健二だが、この交代を受けて、岸田國士・高橋健二「新旧文化部長対談(1)～(3)」(『朝日新聞』昭 17・7・10～12) が発表される。「新旧文化部長対談(3) 生活指導へ」(『朝日新聞』昭 17・7・12) で岸田は、自身の活動について次のように振り返っている。

私が文化部の仕事をして、そこで一ばん悩まされたのは、つまり文化といふ概念が非常に区々であるために、かういふ時代には文化など不必要だといふ極端論、あるひは文化といふのは国の力を弱めるものだといふやうな考へ方をしてゐる者、それから少くとも、われ／＼が文化問題に携はつてゐるために、今までの文化人は新しい文化を指導する能力なしといふ断定を下すものがある。(4 面)

つまりは、当初から照準をあわせていた〈文化〉という用語・概念の問い直しこそが、大

政翼賛会文化部長・岸田にとって、その間の活動を振り返ってなお、最重要課題にして最大の難問だったのだ。こうした岸田による〈文化〉論は、当時の言説に対して明示的な論点の提示から〈文化〉を論じる基盤的フォーマットの提供まで、大きな影響力を及ぼしていった。

こうした中、近代以降、こと昭和10年代に入ってから度々問い直されてきた西洋／東洋という難問もまた、それをとりまく歴史的文脈を更新しながら、議論されていく。『日本人の生活と文化』（日本文化中央聯盟、昭15）や『言葉の文化』（中央公論社、昭18）などの著者でもある長谷川如是閑は「古典運命と近代文明——特に日本の場合に就て——」（『現代』昭16・6）において、『東洋一般が『西洋化』に熱中してゐた時には、東洋人自身も、すべての変化現象を主として世界的の角度から見たので、自国の固有文化を見ることを却つて疎そかにした』とこれまでの日本における近代化＝西洋化を批判的に捉えた上で、『今日のやうに一層東洋人の自覚の強くなつて来た時には、より意識的に、東洋固有の文化の性質が、東洋諸国の近代文化に現はされるやうになる道理』（14～15頁）だと述べて、『東洋』という自覚がせり出して来た様相を描きだしている。やはり西洋文化との比較から東洋を問題化する森谷克巳も「東洋文化論」（『中央公論』昭16・10）において、『東洋文化が問題となる場合には、古代ギリシヤ・ローマの文化に源流を汲む西洋文化に対しての東洋文化が問題となる』、『従つて東洋は広くアジアの意味に解されねばならない』（210頁）と前提し、つづいて『今日の東洋は、皇国を除き白人列強のために植民地、半植民地の状態におかれ政治的、経済的に強度の従属を余儀なくされてゐるといふことも顕著なる事実であるが、その結果、東洋諸民族の文化は正常な発展を阻害され、植民地的停滯に陥つてゐる』（223～224頁）と現状を示した上で、日本の役割を次のように述べていく。

停滯的な、植民地的な東洋世界においても日本のみは言ふまでもなく大に例外をなしてゐる。日本文化は躍進的な発展を遂げてゐるからである。わが国は明治維新以来、産業経済、文化等のあらゆる立後れを恢復して驚異的躍進を遂げた。それも畢竟わが国体と民族性の優秀に負ふものでなければならぬが、要するに日本は能く旧来の体制に対し時勢に適応せる革新を加へ得たからである。〔略〕すなはち日本は、旧時の文化、旧時の体制の、棄つべきものは棄て保存すべきものは保存しつゝ、能くこれに対して適応的な革新を加へた。こゝに日本の驚異的な躍進がある。又こゝにわが国が文化的にも比較的最も親近関係にある東洋諸民族指導の責に任ずべき重要な理由がなければならない。（224頁）

西洋を対置した上で、東洋において《例外》である日本は、東洋の《東洋諸民族指導の責》担うべきだという森谷の議論は、数ヶ月後にはじまる太平洋戦争を支えうる論理を擁している。とはいえ、昭和16年12月上旬まではまだ太平洋戦争開戦以前であり、それゆえ、長谷川如是閑・和田清・小泉丹「新しき東洋文化の創造（鼎談）」（『大陸』昭16・12）において、次のような多様な〈文化〉論が語られていたように思われる——『よく東洋々々といふことが謂はれるのですけれど、どういふところが本当の特色かよくわからない』という和田は、『まア、西洋と根本的に違ふんぢやないかと思ふのは、西洋では、何といひますか、自主独立とか、個人とか、自由とかいふやうなことが主ですけど、東洋は、その点が、非常に献身犠牲といふやうなことを主にして、統一とか、和合とかいふやうなことに重きをおいてゐるんぢやないかと思ふ』（96頁）というばかりでなく、日本文化を次のように特徴づけてもいた。

日本の文化をすつかり分析すると、支那要

素でないものを見附けるのは困難である。今日では大分西洋要素を見附けるのが困難位だが、それでは、日本文明は、支那文明、西洋文明であるかといふと決してさうでない。どの時代をとつたつて支那文明といふことはいへない。それはちよつと入つては同化し、ちよつと入つては同化する元があつたことは確かです。エレメントに分解すれば支那要素だけでも、どの全体をとつても支那文明といへない。(103 頁)

中国文化や西洋文化をとりこみつつ、日本独自に取捨選択 - 応用したところに日本文化の固有性をみるという論理は、昭和 10 年代前半からみられたが、それが今なお機能している。逆に、太平洋戦争開戦以後には、伝統的な日本文化の純粹性が排他的に重視されていく傾向が顕著になるので、その意味で、同論は、正しく太平洋戦争開戦以前の〈文化〉論だといえる。

こうして〈文化〉論にも、対米英開戦の予感が看取されるような時期に、岸田は「文化運動への反省——東北文化協議会講演——」(『文学界』昭 17・1)を發表する。《翼賛運動の発足と同時に文化新体制といふ声が起つてきました》、《この声に应じて、最も率直に、同時に最も欣然として立上つたものは、全国に於る知識層》だったと振り返る岸田は、《その知識層の中で、特に情熱をもつてこの翼賛運動に参加しようとした人々は、文化運動の名の下に、新しい組織と活動とに着手した》(24 頁)のだと、〈文化〉論ではなく、文化運動という実践に取り組んだ人々を高く評価していく。ただし、その際にも岸田は、《文化運動の最も重要なことは、文化的知識よりも、文化的感覚》(27 頁)だと断じて、次のようにつづける。

今日文化運動を進めて行く上に於て、各団体に於ても亦、翼賛会文化部自体に於ても、非常に大きな困難を感じ、又それが或る場合には唯一の障害であるかの如く考へ

られるのは、やはり文化運動に対する一種の無理解であることは勿論であります。然し、文化運動が健全に進められて行く時にはこの無理解は漸次消滅するといふ確信を私共は持ちたいと考へます。(28 頁)

つまり、地方文化運動という実践においてもなお、運動以前に〈文化(運動)〉の理解こそを重視し、《無理解》と戦うために言説を紡いでいく岸田の姿が、ここに刻まれている。昭和 10 年代から戦後へとつづく地方文化運動²⁷については本稿の域をでるが、そこにも岸田〈文化〉論のエッセンスが流れこんでいくものであることは、ここで指摘しておく。

最後に、本稿の議論をまとめながら、続稿への展望を示しておきたい。

昭和 10 年代をみわたしながら〈文化〉を考えた時、キーマンの 1 人は間違いなく岸田國士であった。大政翼賛会文化部長として〈文化〉論を発信しつづけたことはもとより、フランス留学経験があり、西洋文化にも明るく、日本(人)にとっての西洋の意味を、作品を通じて考えてきた文学者だという経歴も重要であるし、また、移動演劇を含めた地方文化運動の筋道をつけたという意味でも、昭和 10 年代の〈文化〉について重要な役割を担い、大きな影響力を及ぼした。本稿では、そうした岸田〈文化〉論を、同時代の文脈をも視野に収めながら分析 - 考察してきたのだが、政治に文化性を積極的に導入しようとして、狭義の〈文化〉をひろい領域へとひらき、縦割り機関の横断 - 連携を謳い、国民を主人公とした“生活 = 文化”論や地方文化を展開しては、〈文化〉の大衆 - 国民化を押しすすめていった。

もちろん、一連の〈文化〉論は、歴史的条件下において功／罪を孕むが、「文化の擁護」から「文化の建設」へとシフト・チェンジを遂げた〈文化〉言説は、昭和 16 年 12 月 8 日の対米英戦 - 太平洋戦争開戦以後、さらなる展開 = 転回を遂げていく²⁸。大政翼賛会文化部長を

辞した岸田は、『力としての文化 若き人々へ』（河出書房、昭18）を上梓し、移動演劇へと力を注いでいく。本稿での昭和10年代における〈文化〉言説の編成をふまえた上での、太平洋戦争開戦後における〈文化〉論の調査・分析が、次の課題である。

※本文・注ともに、同時代に即した資料は元号で、そのほかは西暦で書誌情報等を示し、引用に付した傍点はすべて原文による。なお、本研究はJSPS 科研費 17K02426 の助成を受けたものである。

¹ レイモンド・ウィリアムズ／椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳『完訳 キーワード辞典』（平凡社、2011）、138頁。

² この間の文学場における言説動向については、拙著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、2015）ほか参照。

³ 赤澤史朗「戦中・戦後文化論」（『岩波講座 日本通史 第19巻 近代4』岩波書店、1995）、283頁。

⁴ 注（3）に同じ、283～284頁。

⁵ 注（3）に同じ、288～289頁。

⁶ 注（3）に同じ、292頁。

⁷ 「文芸雑談」、「文芸の側衛的任務」、「文化戦域について」の3論文である。

⁸ 安田武「大政翼賛会文化部長のイス——岸田國土論——」（『定本 戦争文学論』第三文明社、1977）参照。

⁹ 今村忠純「岸田國土の戦時下——『生活と文化』と『荒天吉日』と——」（『日本近代文学』1976・10）参照。

¹⁰ 北河賢三「きしだくにお 岸田國土」（吉田裕・森武磨・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、2015）、134頁。

¹¹ 今村忠純「解説」（岸田國土『岸田國土Ⅱ』早川書房、2011）、392～393頁。

¹² 永平和雄「岸田國土おぼえがき——「古い

玩具」その他——」（『日本文学』1956・6）、32頁。

¹³ 作品ごとの読解・分析は今後の課題とした。なお、岸田の新聞小説論については、拙論「昭和一〇年代の新聞小説論——通俗性・芸術性・社会性」（『立教大学日本学研究所年報』2018・8）でふれた。

¹⁴ 拙論「岸田國土「風俗時評」の射程」（『文芸研究』2014・9）参照。

¹⁵ 拙論「従軍ペン部隊言説と尾崎士郎「ある従軍部隊」——文学（者）の役割」（『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、2018）参照。

¹⁶ 拙論「特異な現地報告——岸田國土『北支物情』・『従軍五十日』の読まれ方」（『日中戦争開戦後の文学場』前掲）参照。

¹⁷ この間の経緯については、注（8）安田論、奥出健「大政翼賛会と文壇——岸田國土の翼賛会文化部長就任をめぐる——」（『国文学研究資料館紀要』1981・3）参照。

¹⁸ 文化部長就任に際して岸田によせられた期待に関して、拙論「岸田國土の大政翼賛会文化部長就任をめぐる言説」（『立教大学日本文学』2018・1）参照。

¹⁹ 酒井三郎『昭和研究会 ある知識人集団の軌跡』（中央公論社、1992）ほか参照。

²⁰ 奥出健「文学無力説の系譜——主に戦時下——」（『解釈』1983・8）、拙論「同時代のなかの「文学非力説」論議」（『国語国文』2018・10）ほか参照。

²¹ 注（9）に同じ、180頁。

²² 注（9）に同じ、180頁。

²³ 当該時期の文化政策を主題とした書物を検討した、永島茜「わが国における文化政策論の変遷——昭和10年代における出版物を中心として——」（『文化経済学』2004・3）、岸田の議論にも論及した、大蔵真由美「1940年を中心とした日本における文化政策論の背景と特質」（『文化政策研究』2018・6）もあわせて参照。

- ²⁴ 昭和12年上半期、論壇では「日本的なもの」をめぐる議論が（日中開戦前まで）ブームと化するが、それは文化論というよりナショナリズムの色彩が濃いため、ここでは直接扱わない。保田與重郎「『日本的なもの』批評について——文藝三月号に現れた『日本的なもの』についての総括批評——」（『文学界』昭12・4）、拙論「言語表現上の危機／批評——「HUMAN LOST」」（『太宰治の自伝的小説を読みひらく「思ひ出」から『人間失格』まで』立教大学出版会、2010）ほか参照。
- ²⁵ 同誌同号に、岸田は「一国民としての希望」を発表している。
- ²⁶ 前後する時期に、特集「国民文化の基底」（『新指導者』昭16・1）などもある。
- ²⁷ 北河賢三「戦時下の地方文化運動——北方文化連盟を中心に——」（赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、1993）ほか参照。
- ²⁸ 太平洋戦争開戦以後の“大東亜文化”の語られ方については、第一回大東亜文学者大会をめぐる言説を分析した拙論「第一回大東亜文学者大会の修辞学——大東亜共栄圏言説の亀裂」（『神奈川大学アジア・レビュー』2018・3）、「文学（者）と思想戦——第一回大東亜文学者大会の修辞学・補遺」（『文教大学国際学部紀要』2018・7）参照。